

閉塾セレモニー

これまで塾に出演いただいた皆さまと改めて上越の元気を語りながら、未来の上越にバトンタッチをする「閉塾セレモニー」を開催しました。

令和3年
11月12日 **金**
受付 16:00 開会 16:30 閉会 19:00
【会場】高陽荘(上越市西城町3-6-22 TEL.025-522-2930)

NPO法人上越はつらつ元気塾は平成22年7月に設立してからこれまで10年間、皆さんの熱いご支援のもと、「上越の元気を探る」という目的を掲げ、活動してまいりました。これまで塾に出演いただいた皆さまと改めて上越の元気を語りながら、未来の上越にバトンタッチをする「閉塾セレモニー」を開催します。

16:30 開会 塾長あいさつ
16:45 リレートーク
「私が思う 上越の元気」

● **出演者**

- 渡辺 英美子さん(当時:新潟日报社上越支社長)
H22「設立記念フォーラム」出演者
- 小林 清作さん(ウエカツ工業㈱代表取締役)
H24「ものづくりから生まれる上越の力」出演者
- 堀井 靖功さん(郷土の偉人前島密翁を顕彰する会 会長)
H27「前島密を生んだ上越の秘密」出演者
- 光永 伸一郎さん(上越教育大学大学院教授)
H28「上越の食の元気を探る」出演者
- 竹内 義晴さん(NPO法人しごとのみらい理事長)
R1「上越の未来カレンダーを考える」出演者
- 天明 伸浩さん(上越やまざと暮らし応援団)
R1「上越の未来カレンダーを考える」出演者

18:00 参加者とトーク
18:50 閉会あいさつ
19:00閉会

主催 NPO法人
上越はつらつ元気塾 
上越市高土町1-8-3
[TEL] 025-521-2627 [FAX] 025-520-4141
[E-mail] genki@echigo-joetsu.com

閉塾セレモニー プログラム

上越はつらつ元気塾

オンライン（ZOOM）併用型としました。

○参加者数 / 40名



渡邊 隆

上越はつらつ元気塾 塾長

みなさん、こんにちは。今日はお忙しいところ、ご出席いただきましてありがとうございます。
「上越はつらつ元気塾」のこれまでの流れと私のこの活動への思いを述べたいと思います。

NPO法人上越はつらつ元気塾を立ち上げるにあたって大きなヒントをくれたのが、東京のNPO法人「シブヤ大学」でした。

「シブヤ大学」の塾長である左京さんに、いろいろとお話を伺ってみますと、例えば、江戸時代から続いている着物の仕立屋さんや芸者さんなどからお話を聞いて1、2ヶ月かけてゆっくりとその歴史をひもといて、その内容を授業のカリキュラムに置き換えていく。そしてそれを講義する人と綿密に打ち合わせて大学の授業のように一般の市民の方に公開をしていく。それを繰り返していく中で、渋谷の文化を発見し、普及していく活動をしている大学でした。

私はこれと同じことを上越市でできないかと思いました。「上越はつらつ元気塾」も上越の中にある文化の歴史を発見し、それを一般に公開をしていく。その中で上越の明るい未来を目指し、上越の元気の源を探っていく作業をNPO「上越はつらつ元気塾」で行いたいと思ったのです。

この構想のもとに2010年の7月に設立記念フォーラムを、渋谷大学の学長左京さんをお呼びして開催して、元気塾をスタートさせました。会場には多くの地域のNPOの皆さんと市民の皆さんが集まって応援してくれました。

第一回はつらつ元気塾のセミナーは「先輩から学ぶ」というテーマで始め、先輩から多くの文化人との交流を語っていただきました。それから継続して、現在まで約10年の間、「上越の元気の源はどこにあるのか」をテーマに活動し、多くの元気の源の発掘をして参りました。10年間に展開されたテーマは実に興味深いものばかりでございました(3-5ページに掲載)。最終の2年間は人口減少を前提とした上越の未来カレンダーを作ることをテーマとしました。「子育て」と「農業分野」の分野にかぎり、未来の予測を試みました。人口減少が大変だと騒ぐだけではなく科学的に未来像を描くことが大切だと考えたからです。ただ現状を掘り下げることができたが、未来を予想して対策を出すまでには至らなかったことが悔やまれます。

これまでの活動で、上越のいろいろな宝に光を当て、活性化へのヒントを探ることができたと思っています。そして、その活動の記録をまとめることができました。これは今後の地域づくりを考える上で大きな財産になると思います。

最後になりますが、多くの方々から継続を望む声がありましたが、NPO法人として活動する以上どこかで区切りをつけなければなりません。際限なく続けばマンネリになってしまう。新型コロナウイルスの感染拡大で昨年からの活動ができなかったことも大きかったのですが、塾を一旦閉じることで新たな出発のエネルギーにしたいと思い、今日の閉塾セレモニーをやることに至りました。

本日は、これまでの塾に講師やコメンテーターとして参加いただいた方をお招きしております。参加当時の思い出話などいただき、楽しい閉塾セレモニーにしたいと思います。

皆様のこれまでの厚いご支援に対し深く深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。



H22「設立記念フォーラム」出演者

渡辺 英美子さん

新潟日報事業社 代表取締役社長
(当時は新潟日报社上越支社長)

上越にはいいところがたくさんある 鮮魚、山菜などおいしいものが多いが、とりわけ酒のおいしさを忘れることができない。そして、何より上越のすばらしいところは「人」である。人と人がしっかりつながっており、支えあってきた文化があるのだろう。

前身の「上越はつらつ元気塾」は、平成18年の発足以来、大学をはじめとする様々な伝統、文化を結び付け、市民の力を発信していこうと活動が進められてきた。新潟日报社は様々な場で企画、発信などで協力してきた。

熱気ある設立記念フォーラム 平成22年、新生NPO法人として再出発した時、記念フォーラムが開かれ、シブヤ大学の学長左京泰明さんの講演があった。その後、トークセッション「上越地域の市民力を考える」が開かれ、私はそのコーディネーター役を務めた。

上越地域で活躍している「城下町高田花ロード実行委員会」「お馬出しプロジェクト」「南本町活性化協議会」「高田町ネット」「えちご若者元気塾」「マミーズ・ネット」の皆さんからの活動報告があり、左京さんからコメントをいただいた。熱気のあるフォーラムであった。

熱意を持って活動する市民が多い 上越市民には様々な分野で熱意をもって活動する人が多いと感じてきた。NPO活動に取り組む人たちも多い。上越が自慢できることなのではないか。なぜ上越にはこうした活動が盛んなのだろうか。「くびきのサポートセンター」のような中間支援組織がしっかりしていることも大きいだろう。また、互いに顔の見える関係や連綿と続く「支えあいの文化」があるのだろう。

「はつらつ元気塾」の理事として 発酵文化の歴史とその美味、ものづくりの歴史や先端企業の現地見学等々、いろいろと学ぶことが多かった。新聞社という本業以外に、理事として企画、運営に携わり、市民塾当日の受付役など市民の皆様と触れ合う場を持てたことが、その後の自身の職務や活動に大変役立っている。渡邊塾長の壮大な夢とリーダーシップをもとに、たくましく活動してきた「元気塾関係者」の皆さんに改めて感謝し、敬意を表したい。

魅力ある町としてダイナミックに発展 新潟日报社では、県内各地域の豊かな発展を願って「未来の力」と題するプロジェクトを進めているが、そのシリーズの出発は上越からであった。新幹線の開通、「うみがたり」の開館をはじめ、魅力あるダイナミックな町として発展、進化している上越地域がますます元気になっていくことを願っている。



H24「ものづくりから生まれる上越の力」出演者

小林 清作さん

ウエカツ工業(株) 代表取締役

いま、上越の企業はなぜ忙しい？ 約30社の経営者が集まる「上越ものづくり協議会」がある。そこでの話題として「今、上越のものづくり産業は、忙しい」「技術者が不足している。人手が足りない。納期が守れない。皆さん忙しい」という声が多い。コロナ禍を含めて、大変な時代だといわれるこのような時代に、上越の企業はなぜ忙しいのだろうか？

経営者が誠実・まじめであり、社員が勤勉である 「雪に耐えながら、努力している」「あまり冒険をしない」「健全経営に努めている」「倒産件数が少ない」等、健全経営を目指すという当たり前のことを行っているからであろう。

残念ながらヘッド企業といわれる中核企業はなく、下受け企業が多い。しかし、大手メーカーとの信頼関係が厚く、安定した生産が進められている。孫請けが少なく健全経営である。

交通網の整備がすすめられてきた 過去には、星野工業が製品の納入のためにヘリコプターを使用したという事実がある。豪雪で輸送手段を奪われ、トヨタの自動車部品(シートベルト)の納入時期(ジャストインタイム)を守るための非常手段だった、という。

しかし、近年は新幹線の開通、高速自動車道の整備などで、東京近郊県と変わらない時間で対応できるようになっている。

上越地域は異業者集団である 上越にはこれという特色ある産業はない。しかし、それがまた特色でもある。ネット時代である。上越市の産業課、商工会議所等の情報によると、「製品・部品の発注のために、上越市へアクセスすると、実に様々な企業が検索されて出てくる」「そこから多様な注文がやってくる」ということである。「異業者集団」というところが、上越の企業の特色でもあり、好調な原因となっているのではないか。

地場産業を支えた織物工業 かつて何社もあったスキー会社は一社もない。農機具会社は大島農機一社であり、しかも建設機械の生産が主流に切り替わっている。

上越の地場産業を支えてきたのは織物工業であり、かつては高田だけで20社あった。しかし、現在では、織物工業だけで頑張っているのは星野工業一社である。有沢製作所の創業は明治42年であり、今は一部上場の他の業種へと変わっている

ウエカツ工業では織物の占める割合は5.6%になっている。40年が経過して、マレーシアへの進出、ハードディスク、精密加工業への挑戦など、常に先を見て新しい経営を模索してきた。

冒険・チャレンジで上越に元気を 特色を持たず、堅実経営を進めていくのも大切であるが、一方で、チャレンジしながら世界を目指していくということも大切ではないか。冒険、チャレンジ精神をもって、さらなる「上越の元気」を高め、広げていってほしい。



H27「前島密を生んだ上越の秘密」出演者

堀井 靖功さん

郷土の偉人前島翁を顕彰する会 会長

上越には偉大な人が多い 上越で活躍した偉大な人の功績について、多くの人に知ってもらい、後世に残していきたい。素人でもできる顕彰活動を進めたい。こんな思いから、8年前に高校の同期生が誘い合って顕彰する会が始まった。

前島密の新しい資料、足跡が見つかったのが本格的活動を進める契機となっていった。その活動の進め方も「学ぶから伝える」へ、そして「全国への発信」と変わっていった。

前島密の生誕180年 生誕180年を迎えた平成27年、様々な団体に働きかけて実行委員会を結成し、盛大に記念式典を開催することができた。その後、さまざまな講演会や展覧会、ふるさとに残る前島密の関係資料を探し、足跡を訪ねる現地研修などを各地で展開してきた。

さらに、終焉の地・横須賀を尋ねるとともに、その後は、毎年祥月命日に開かれる墓前祭に参加してきた。

前島密の関係資料・足跡を探る 平成31年、「前島密の没後100年」がやってきた。これを契機に、上越に残る前島密の関係資料・足跡を探すという取組を展開することとした。100点を超える逸話、石碑、のぼり旗、掛け軸、扁額などが見つかった。それらをまとめたのが『前島密・ふるさと上越との絆』の冊子である。新潟日報との共催で開いた講演会「今こそ故郷の偉人前島密に学ぶ」には多くの参加者があり盛り上がった。

この地域には、改めて「隠れた前島ファン」が多いことが分かった。前島記念館は活動のシンボルであり、顕彰団体も多い。地の利と人の和がそろった結果といえるだろう。

魅力的な前島密 前島密の三大功績として「江戸遷都」「鉄道開通」「郵便制度」がある。

大久保利通の大阪遷都の主張に対し、「江戸遷都」を強く提言し、実現している。前島密がいなければ東京は首都にならなかった。横浜・新橋間の鉄道開通に果たした役割も大きい。

明治4年の東京―大阪間創業を皮切りに、全国に郵便制度が整い、日本は着々と近代化の歩みを進めていく。多岐にわたる事業を、しかも短期間にまとめ上げた功績は見事である。

没後100年たってもまだまだ新しい発見・資料が出てくる。今後は「前島密の不思議を追い求める」といテーマで活動を続けていこうと考えている。

前島密は上越に元気を与えてくれた 前島密は、いつどこでこのような知識・能力を身に付けたのであろうか。その不思議を解き明かす秘密は、生誕地上越にあるのではないか。この上越の地で志を強くもち、先を見る力を得たのではないか。そこを解き明かすことが大事である。

前島密は、この上越に大きな元気を与えてくれた。これからも顕彰活動を進めながら、その功績を後世に伝えていきたい。



H28「上越の食の元気を探る」出演者

光永 伸一郎さん

上越教育大学大学院 教授

上越の食の元気の基本は和食 上越教育大学に来て28年になるが、多くの人と触れ合いながら、上越の食について学び考えてきた。上越の食の元気を探る基本は、無形文化遺産といわれる「和食」が中心であるといえるだろう。

上越の食の元気(その1)発酵食品 「発酵の町上越」といわれる。まずは酒。いい米、おいしい水を使っているのだから、いい酒は当然のことである。さらに味噌、甘酒、しょう油と続く。

「みそは医者いらず」といわれるが、わが家族も上越に来て以来味噌汁を欠かしたことがない。

上越市出身で発酵食品・醸造学・微生物研究の大家、坂口謹一郎博士の功績、影響力は大きく、上越の食を考えるうえで欠かすことはできない。ぶどう、ワイン研究の功績が大きい川上善兵衛も忘れることができない。上杉謙信の功績・生涯と酒のかかわりも、「上越の食・発酵食品」を考えるうえで一つの話題になるだろう。

上越の食の元気(その2)山菜、新芽野菜 上越の大きな特色である多くの雪、そのあとに芽吹いてくる多くの山菜、新鮮野菜がある。ウド、コゴミ、タラの芽、ふきのとうなどの山菜。これらは日本原産のものが多く、縄文の昔から上越の人々の健康を支えてきたのではないだろうか。「春に料理には苦みを盛れ」ということわざがある。春の恵みである山菜の苦みは、冬の間の塩分を知らず知らずのうちに取り除いてくれる健康効果があるのではないか。

春の山菜や野菜は、生活習慣病を予防してきた「上越の元気の源」といえるかもしれない。

上越の食の元気(その3)麦芽水飴 酵素を利用した上越が誇る食文化もある。植物(麦芽)に含まれるアミラーゼ(消化酵素)を使った食品がある。大杉屋の「栗飴」などもその代表だろう。「もち米と麦芽から造ったやさしい甘みの水飴」として紹介されている。

大麦を麦芽にすると、アミラーゼという消化酵素ができて、でんぷんを甘くする。日本では水飴で知られるが、西洋では、ビールやウイスキーを生み産業を発展させてきた。こうじ菌(米こうじ)もアミラーゼであり、でんぷんをぶどう糖(甘味)に変えて、甘酒などになる。

私はアミラーゼで学位をとっており、発酵文化とかかわりが大きい。上越はつつ元氣塾でさまざまな団体や多くの人と交流させていただいたことには大変感謝している。

「上越の食の元気」の裏には科学あり 上越の食の元気について、背景に「科学」があることを大切にしていきたい。そういう意味で上越の食の文化は調べ甲斐があり、いろいろな秘密や発見があって楽しい。これからも多くの人と触れ合いながら、さらに研究を進めていきたい。



R1「上越の未来カレンダーを考える」出演者

竹内 義晴さん

NPO法人しごとのみらい 理事長

NPO法人「しごとのみらい」 「働きやすい会社を作るにはどうしたらよいか？」に取り組んできた。あわせて、2013年から、妙高高原に住みながら東京の会社に勤めるといふ、二足の草鞋を履くという働き方「複業」を模索している。

「地方と複業を結び付けたい」という考えから2017年に取り組みを始めた。今考えれば「コロナ禍におけるテレワーク」という形をこの頃から始めていたことになる。

複業に期待すること 上越の地に対して熱い思いを持つ都会の若者や、地元に戻りたいと願っている上越出身者がいる。こうした人を、上越の企業が活用できないだろうか？「限られた期間だけ勤務する」という形を採用することで、企業にとっても働く人にとってもメリットがあるのではないか。当初は、こうした考え方は夢物語として相手にされなかったが、都市部の人たちを中心に関心を持つ人が増えるようになってきた。

人口減少、高齢化の進む中で 上越地域の人口減少が進んでいるのは事実だし、このままでは閉塞化が進み、持続が困難になってしまうのではないかと。日本全体でも人口減少、高齢化が進み、働き手がいなくなっているという現実の中で、複業という考え方が役に立つのではないかと。昔のようににぎやかな商店街や企業が戻るは無理だとしても、1日でも2日でも地域の仕事に貢献できる人が増えてくるのはいいことなのではないか。こうしたことで地域の維持に貢献できるのではないかと。

都市部とつながることで地方の企業が発展 実際に都市部と地方を結び付ける仕組み、システムを構築することは、なかなか難しいことである。そうした中で、2019年の4月から、妙高市の委託を受けて、「地域の企業と複業をどうつなげるか？」という取り組みを始めている。まだまだ浸透していくのは難しい。地域の建設業、サービス業、介護施設では人手が足りないのが現実であり、二つの仕事をかけ持つなどは無理なのも現実である。

しかし、「都市部とつながることで地域の企業が発展できることはないのか」などを一緒に考え、前向きな取り組みを始めている。

帰ってくる場所を整える・それが上越の元気 3月、高校を卒業して大学に進む人たちも多いだろう。これまでの考え方でいえば、「地元を離れば、もうかえってこない」ということになる。しかし、地域が嫌で出ていくのならわかるが、地域への思いを持っている子どもは、一回家を離れても、いつか地域を思うことが出てくるはずである。希望した時に帰ってくる場所、一日でも二日でも地域で働ける仕事を整えておいてあげたい。

そうした場を作り、条件を整えてあげることが「私の考える上越の元気」である。



R1「上越の未来カレンダーを考える」出演者

天明 伸浩さん

上越やまざと暮らし応援団

上越は豊かで魅力的な土地 27年前に上越・吉川区にやってきた。山間地であるが、それなりに広い農地もあり、がんばってきた。山間地農業は大変だが、若い人も移り始めており、複業のような形で様々な工夫も進められている。

高田平野全体を見ると、周囲を美しい山々に囲まれており、豊かな山林、そして海が広がっており、大変貴重な土地である。地元の人は気付いていないかもしれないが、それが上越にとってとても素晴らしい魅力なのだ。そこに惹かれて移住してくる人があり、増えていくだろう。

山間地の農業は大変、でも 山間地の農業は大変である。米価の低下など不安な面もある。「もしかすると、都会とは縁を切ってこのまま地方にうずもれてしまうのかな？」と思ったこともある。しかし、AIやITの普及によって生活が変わってきている。コロナ禍という、大変な状況の中で「新しい気付き」があるのかもしれない。

考え方を換えれば、農業をしていれば「食べること」には困らないわけで、コロナの影響で困っている都会の人などに「コメを贈る運動」も始めたところ、快く協力してくれる仲間も出てきた。「米は余っているのに食べられない人がいる」というおかしさ、矛盾がある。

政治の手の届かないところへ、地方から手を差し伸べることができることに気付いてきた。

困った人のことを想像してあげる 地方に住むということは、都会には気付かないことに気付くことができるという特典がある。地方から都会に出て行って困っている若者、海外から働きに来て食べられない人など、困った人のことを想像してあげることができるのだ。自分にとって、今の世の中を知る上で大変な力になっている。

村に暮らしていると、助け合っていくのは自然なことなのである。それが、生きるうえでの大きな力を生み出してきた。農村、山林を大切にしない文化は崩壊していくともいえるのではないか。農村がなくなって、日本列島に人が暮らしていくことができるのだろうか。「強いものが勝ち残っていく」、こういうことでいいのだろうか。

かっこうつけずに、あるがままを受け入れる 自分自身のこれまで生き方を振り返ってみると、「自分は力強く勝ち残って農業を続けていくのだ。力尽きて農業をやめていく人がいることも仕方ないのだ」と考えていた。ところが、自分の子育てを通して「弱い人のことを思い行動できる、実はそのことが強さなのではないか」と思うようになってきた。弱い人を思い、助け合っていくことこそが、人間的な豊かさなのではないだろうか。

上越を元気にしていくには、「かっこうをつけずに、あるがままを受け入れていく」ことが大切なのではないか。そうすれば、上越はもっともっと元気になっていくのではないだろうか。



小林 毅夫

上越はつらつ元気塾 理事

以上をもって、上越はつらつ元気塾のすべての事業が終了し、閉塾となります。平成22年以来10年間以来、大変ありがとうございました。

リレートークにご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。過去を振り返り、未来を展望するにふさわしいお話しをいただきました。

本日のお話の中で一つだけキーワードを挙げるとすれば、天明様の「あるがままを受け入れる。いいところも悪いところも受け入れる。それが上越の元気だ」が強く印象に残りました。私自身教育にかかわってきた者として、これからを考えるうえでも、大切に心に残しておきたいと思います。

10年間の塾を振り返ってみると、テーマについても、講演いただいた内容を見ても、そこにはいつの時代も、常に前を向き、未来に向かって精いっぱい「元気」を生み出してきた多くの人たちがいたことを思います。そして、今も「地域を見つめ、働きかけ、切り開く」ことに熱い思いを持ち、「一步前へ！」と歩きだしている人がいることをうれしく思います。

人口減と上越のこれからを考えようとした「未来カレンダー」づくりは、コロナ後の上越、日本、世界を展望するという新しい要素を加えながら、様々な人に受け継がれ、新しいエネルギーを得て、求め続けられて行ってほしいと願っています。

私たち理事一同、常に渡邊理事長を中心に前を向きながら、がんばってきました。渡邊理事長の鋭い先見性と温かい包容力に感謝しながら活動を続けてきました。

この元気塾を支え、ご協力をいただいた皆様に心からお礼を申し上げて閉塾の挨拶といたします。



上越はつらつ元気塾

10年の活動に幕

講師迎え閉塾セレモニー 12日

上越市のNPO法人「上越はつらつ元気塾」は11月12日、約10年の活動に幕を下ろすことにした。これまでセミナーに出演した講師陣を迎え、同市西城町3の高陽荘で閉塾セレモニー写真チャリシを開催する。参加者は、ものづくりから生

まれる上越の力「雁木がどをテーマに、市民が自ら生んだ上越のくらし」な由に参加できる講座を企



画・開催してきた。閉塾セレモニーでは、上教大の光永伸一郎教授やウエカツ工業（東本町5）の小林清作社長ら、これまで塾に出演してきた講師陣が「私が思う上越の元気」とのテーマでリレートークを行う。午後4時半開会。予約制で、参加費は無料。ピ

デオ会議システム「Zoom（ズーム）」を使用したオンラインでも参加できる。電話、メール、フックスなどから申し込む。メールアドレスは enki@ecjingo-joetsu.com。問い合わせは上越はつらつ元気塾、025（521）2627。

（新潟日報 令和3年10月28日掲載）

「上越はつらつ元気塾」閉塾

「元気の源」探求活動10年

渡邊塾長「爽やかに滞りなく」

2010年にNPO法人として活動をスタートし、上越市の歴史、産業、文化から「元気の源」を考えてきた「上越はつらつ元気塾」（塾長・渡邊隆 関根学園理事長）が12日、10年間の活動を終え「閉塾」した。同市

西城町3の高陽荘でセミナーが行われ、過去10年間で講師を務めた人たちが、それぞれの思いを語った。これまでに取り上げたテーマは「発酵」や「バテンレース」「鉄道」「前島密」など。上越が先進地として発

展してきたものを深掘りし、その背景にあったものを学んだ。また、人口減少と向き合い、子育てや農業、働き方について参加者と意見をまとめてきた。同日は、講師を務め

た人の中から6人が、自身の考える「上越の元気」と題して意見を述べた。19年の「上越の未来カレンター」で出演した同市の農業、天明伸浩さんはIT技術の進展で変わった山里の居住環境や、自然

の中で暮らしを求め、消費者の志向を指摘。「上越を元気にすることは、かっこつけず、あるがままを受け入れることだ」とした。

昨年は新型コロナウイルスの感染拡大もあって活動はなく、実際10年での活動終了。渡邊塾長は閉塾の理由を「閉め時、というのもある。一区切りがついた。次の新鮮なもの（動き）につながれば」とし、「爽やかに

滞りなく終える」と関係者に感謝したと述べた。



関係者から花束を贈られる渡邊塾長

（上越タイムス 令和3年11月16日掲載）

次世代に遺産残せた

「上越はつらつ元気塾」閉塾



閉塾セレモニーで地方の暮らしや豊かさについて語る天明伸浩さん。上越市

みながら、中山間地の移住者増加に取り組み「上越やまきと暮らし応援団」の天明伸浩さんは、自身の移住の経験も交え、「弱い部分から学ぶことも多い。地方も都会のように強くしようとするのではなく、あるがままを愛せれば面白い」と語った。

参加者からは「懐かしい思い出でいっぱい」「上越のことについて、貴重な勉強ができた」と多くの声が寄せられた。セレモニーの様子はオンラインでも配信された。

終了後、渡邊塾長（上教大名誉教授）は「閉塾は悲しいことではなく、次へのステップ。上越の次世代に向け遺産を残せたと思う」と歩みを振り返った。

上越市のNPO法人「上越はつらつ元気塾」が10年余りの活動を終え、市内で閉塾セレモニーを開いた。これまで活動を支えてきた講師経験者らが出演し、元気塾での思い出や「私が思う上越の元気」について思いを語った。

元気塾は2006年に上越教育大と県立看護大、上越市、県、新潟日報社による実行委員会が主催する市民向け講座としてスタート。講座終了後も活動継続を望む声があり、10年にNPO法人として再出発した。上越の食や産業、文化など毎年テーマを変え、講演や事業所見学などを通して市民の学びに貢献12日、閉塾セレモニーが開かれた。上越市吉川区で農業を営

（新潟日報 令和3年11月16日掲載）

多彩な視点で活性化探る

上越市のNPO法人「上越はつらつ元気塾」が今年、10年余りの活動を終えた。発足時から塾長を務め、さまざまなテーマで地域の活力づくりに取り組んできた渡邊隆さん（80）＝関根学園理事長＝に、これまでの歩みを振り返ってもらい、成果や今後の課題を聞いた。

渡邊塾長インタビュー

上越はつらつ元気塾閉塾

「2010年度にNPO法人化した元気塾が区切りを迎えました。市民講座を開いてきました。特に印象に残っている活動は、

「パテレース作りを中心とした地場産業の発展を扱った12年度が印象深い。ハイテク分野で上越地域を引っ張る有次製作所などの企業も、パテレースから始め、加工する素材が変わっても、基本は織りたてではないので、次々とアイデアが出てきた」



わたなべ・たかし 1940年生まれ。十日町高卒、東京教育大（現筑波大）理学研究科博士課程修了。2003年度から上越教育大学長、09年度から県立看護大学長を務め、17年度から関根学園理事長。上越市在住。

次世代への継承が課題

「白かった」
「終盤の2年間は、人口減少を前提とした上越の未来カレンダー作りにも取り組まれました。」

「子育てと農業の分野で未来の予測を試みた。人口減少が大変だと願っただけでなく、科学的に未来像を描くことが大事だと考えたから。ただ、現状を振り返ることができたが、未来を予測して対応策を示すまでには至らなかった」

「活動の成果と課題は、上越のいろんな宝に光を当て、活性化へのヒントを探ることができた。地域の文化人ら多くの市民が関わり、活動の記録もまとめた。これは今後の地域づくりを考える上で、大きな財産になると思う。元気塾の精神を、次代を担う人たちにどう引き継いでいくかが今後の課題だ」

「閉塾セレモニーでは継続を望む声もありました。NPO法人として活動する以上、どこかで区切りをつけなければならない。際限なく続ければ、マンネリになってしまう。新型コロナウイルスの感染拡大で昨年からは活動ができなかったことも大きかった。塾をいったん閉じることで、新たな出発へのエネルギーにした」

2010	先輩に学ぶ～「上越の文化を伝える」を考える
11	坂口隆一郎先生が上越にもたらしたもの
12	ものづくりから生まれる上越の力
13	鉄道が生み出した上越の元気
14	電力から考える上越の元気
15	前島密を生んだ上越の秘密
16	上越の食の元気を探る
17	雁木が生んだ上越のくらし
18	上越の未来カレンダーを考える「人口減が上越を元気にする?！」
19	同上

上越はつらつ元気塾 上越教育大、県立看護大、上越市、県立地域振興局、新潟日報社が連携して2006年度に始めた連続市民講座を続けてほしいとの要望を受け、10年度にNPO法人として設立。「上越の元気の源はどこにあるのか」を探るため、毎年度さまざまなテーマを設定して市民講座やフィールドワークを展開してきた。

（新潟日報 令和3年11月19日掲載）